

## 序 文

東京大学医学部

井 上 英 二

本報告書は、「母子の健康と遺伝的要因に関する研究」と題して、厚生省心身障害研究遺伝研究班によって刊行された初年度の研究報告書に続く第2年度の研究報告書である。

厚生省心身障害研究遺伝研究班が昭和49年度に組織されるまでの経過、および初年度の研究活動については、すでに上記の初年度の研究報告書の中でのべた。昭和50年度に至り、研究課題を、「心身障害の発生予防に関する遺伝学的研究」と改め、研究活動の具体的な内容を表わすものとした。さらに一部の細分課題の変更と分担研究者、研究協力者の交替を行なった。しかし、本研究班の目的や組織の大綱に変更はなく、5種の副課題、および各副課題を構成する大多数の細分課題とこれらを担当する分担研究者は前年度を踏襲している。

初年度の研究報告書にものべたように、本研究の目的は、要約すれば、人類遺伝学とその関連科学が集積した龐大な知見が国民の健康水準の維持向上のために十分に還元されていない現状にかんがみ、研究者が協力して、心身障害の発生を予防するための体系的な研究活動を行なうことである。

多種多様な心身障害の中には、いままでもなく、明確な外因によって生じるものが多く含まれている。しかしながら、初年度の研究報告書にも繰返しのとおり、すべての新生児の少なくとも5～5.5%は、その後の生活上において、遺伝的要因が重要な役割を演ずる疾患に罹患するものと推定されている。これのみを以てしても、将来の国民の健康水準の維持向上のためには、遺伝学を応用した心身障害の発生予防が一つの重要な方策であることは明瞭であろう。

忘れてならない重要なことは、上にのべた目的に沿った予防活動は、当事者、すなわち次代の国民を送り出す人々の自発的な意志から出発するものであるということである。人類遺伝学とその関連科学が集積した知見に基づく予防方策は、この当事者の意志に応じて提供されるものである。本研究班が、遺伝相談を中心とする予防システムの研究に一つの重点を置いている理由は、まさにここに存するのである。

本研究班の活動を、第2年度が終了した時点で振り返ってみると、いくつかの重要な成果を上げることができたと考えられる。これらは要約して分科会報告の中に記されているが、これらの成果を盛った本報告書が、すでに刊行された初年度の研究報告書、および引続き刊行されるであろう第3年度の研究報告書とともに、臨床医学、予防医学の各方面で活用されることを祈って止まない。

本年度も、昨年度と同様、幹事の重責を引受けて下さった荒川雅男教授（東北大学）、松永英部長（国立遺伝学研究所）、田中克己教授（東京医科歯科大学）、および半田順俊教授（和歌山医科大学）の絶大なご協力によって、研究班の運営、本報告書の刊行、その他諸般の研究活動が行なわれたことを記して、深甚の謝意を表したい。

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

本報告書は、「母子の健康と遺伝的要因に関する研究」と題して、厚生省心身障害研究遺伝研究班によって刊行された初年度の研究報告書に続く第2年度の研究報告書である。